

生涯学習フェスティバル大会講演

● 笛吹市短歌大会

とき／平成二十五年四月二十四日（水）

ところ／山梨県笛吹市・笛吹スコレーセンター

対談 岡井隆×三枝昂之

「男からみた最近の女歌」

● 伊香保短歌大会

とき／平成二十五年五月十六日（金）

ところ／群馬県渋川市・伊香保温泉ホテル天坊

講師 高野公彦

「推敲の楽しさ」



「男からみた最近の女歌」

対談

岡井 隆×三枝昂之

「原発を当事者として詠う」

三枝 今回は、女性の歌をテキストにして、いろいろと歌のことを話し合おうということです。去年、今年もそうですけれど、東日本大震災の作品を集めた歌集が出るようになっていきます。

岡井 いくつも出ましたね。

三枝 今年も、いろいろな賞が次々と発表になっていきますが、「東日本大震災をどのように詠ったか」というのが、評価のひとつのポイントになっているように思うのです。さいたま市が現代短歌新人賞を設けておりまして、今年度の受賞歌集は高木佳子さんの『青雨記』でした。高木さんは一九七二年生まれですから、四十歳かな。福島在住の方で、小学生の娘さんがいらっしや

います。この『青雨記』は、福島在住という原発事故の当事者としてどういうふうな原発を詠ったか、しかも女性の立場でどういうふうな詠ったかということが注目されました。私も、この授賞式でコメントする必要がありますので丁寧に読んだのですが、なかなか良い歌集だと思いました。ちょっと読んでみましょう。

給水の口より水はほとばしり春のひかりをうけて耀ふ 3・18

このどこにひかれたか。「3・18」と、まずここにびつくりしたのです。今、盛んにメディアがピーアールしているのは、「三日間は助けの手が来ないから、三日間だけは自給自足できるようにしよう」ということです。

岡井 そうそう。

三枝 私は神奈川県の川崎に住んでいます、隣の横浜市は市民向けに家族三日分の水の缶詰を販売しています。ところが川崎はしてくれないから困っているんですけど、でも、これを見ますと、三日では足りない。三月十八日といったら一週間ですね。

一首全体としては、「給水の口より水はほとばしり」、給水車で待望の水がきて、ポリタンクか何かに受けている。その水が勢いよくほとばしっている、というのが上の句。その水がほとばしりながら春の光をうけてきらきらと耀いているよ、という歌です。私が注目したのは「春のひかりをうけて耀ふ」というのが、水の光り具合であると同時に、やっと水を確保できたということ。自分の安堵感でもあるということ。そんなところに、心がひかれたのです。

岡井 そうですね。ただ、これは「3・18」

という注釈付きですから、三月十八日時点での歌だということを知らないで読んでしまつと、わからなくなつてしまいます。状況下の歌というのは、みんなそうでしょうね。

三枝 機会詩のひとつの問題点でもありませんね。

岡井 そうですね。「春のひかりをうけて耀ふ」だったら、どんな場面だって成立するわけでしょう。それが「給水の口」で一気に変わつちゃうわけですからね。なかなか、しかし、歌は作り慣れていらつしやる方の方ですね。

三枝 二首目です。

その人は明日逃ぐる人明日を想ひ明日を信じて明日逃ぐる人

福島の人たち、ことに母親は自分の子どもをどういふふうにして放射能被害から守るかということが、非常に切実なわけですよ。たとえば俵万智さんは仙台の方ですけど、でも、遥か沖縄の石垣島へ引つ越しま

した。

岡井 そうそう。

三枝 高木さんはもろもろの条件があつて、とどまらざるを得ない。とどまらざるをえない立場だと、逆に「子どものことを思つてなぜ逃げないのか」という非難を受ける。逃げたいけれど逃げられない、でも逃げる人から「なぜ逃げないのか」と言われて、非常に煩悶するわけです。その煩悶がこのような歌になつているのだと思います。

岡井 仙台から大口玲子りょうこさんも子どもを連れて宮崎まで逃げたし、俵さんや大口さんだけではありませんよ。

三枝 少しでもリスクのない所へ子どもを連れて行くのが、母親の責任だという気持ち強いからでしょうね。

岡井 そうでしょうね。それで父親が残つてしまつて、場合によっては離別するということまで起きたと聞きますから。この歌、なかなか要領のいい、きちきちつとした歌です。「明日逃ぐる人」と言つておいて、「明日を想ひ明日を信じて」、だけどこからはいなくなるんだよ、と。しかし自分はそのうわけにはいかない。なかなか

複雑な心境をうまくまとめあげている歌ですね、これは。

三枝 原発あるいは東日本大震災、津波の歌もそうですけれど、当事者の歌の中には被害者であることを誇張するような詠い方がけつこうあつて、それをどうコントロールしながら表現するかがひとつの課題です。この歌などは非常に抑えながら、だけど自分の切実な感情を出しているのではないのでしょうか。

岡井 そう、なかなか冷静な態度ですね。

「原発はむしろ被害者」の歌に触れて

三枝 原発の話になりましたので、岡井さんにお伺いします。岡井さんにこういう歌があります。この歌について、だいぶ議論されたり、岡井さん自身がたたかれました。

原発はむしろ被害者、ではないか小さな声で弁護してみた

普通、原発は加害者なわけです。だから

みんなが逃げて、高木さんも逃げたいのだけれど逃げられないという煩悶の中で歌を作る。だけど、岡井さんは原発を被害者だという。

岡井 大津波という自然災害の被害者だと思っただけですね。これはちょうど一ヶ月後の四月の半ば、文章と一緒に日本経済新聞に発表した歌です。僕みたいに、旧制高等学校時代、一九五〇年代にインシユタイン以来の原子核物理の講義を聞いてきている理系の人間は、わりと冷静に見ていたのですけれど、その後しかし、人間というのが風評にいかにも弱いか、そして政府そのものの対応は非常に下手でしたから。あんなかたちで不安を煽れば煽るほど、そういう人は当然出てくるわけです。考え方はだいぶ変えましたけれど、あのときはそう思いました。

長年、原子核あるいは原発関係の仕事をしている人は日本全国にいます。そういう人たちから、電話、お手紙、投稿される短歌の内容などで「岡井さん、よくぞ言ってくれた。自分たちは非常に肩身の狭い思いをしてきているけれど、実は日本の電力の

供給のために長年にわたってこういう仕事をやってきて、今、なにか悪者みたいに言われる。非常に不本意だ。子どもも、迷惑を受けている」と。日本中には、多分、両派いるのだと思うのです。こういうことを見ていると、もっと冷静にやるべきでないかという感じがしましたね。

三枝 私は岡井さんの歌をこういうふうに解釈したんですよ。つまり、原発自体は文明の利器で、非常に優れたものなのだけれど、ただ、人間が中途半端なかたちで活用しているという観点から見ると、原発というのは不完全な扱いをされていて、むしろ被害者なのではないかと。そういうことかなと思います。

岡井 深読みするとそうなりますね。僕は医学で医者の方だけれど、現実には、自分たちの手がとても届かないような場面で仕事をやって、いろいろな副作用を起こしているというのが科学方面に従事している人間の実感ですものね。だから、なんていうかな、お互いもう少し冷静に話し合えば良かったんでしようけれど、マスコミを中心として、うわーっと悪者扱いでしょう。

日本人同士で、もうちょっと冷静な話し合いがあっても良かったんじゃないかとは思いましたね。

三枝 そうすると高木さんの歌は。

岡井 冷静ですよ。

三枝 渦中にいる人がどういうふうな良質な作品を作るかという、ひとつの典型例と言えますね。

「物」を捕まえるうまさ

もうちょっと若いところにいきたいと思います。最近の女性歌人で、僕は柳澤美晴さんという人を非常に信頼していていますね。歌集『一匙の海』から五首挙げておきました。

古書店に軒を借りれば始祖鳥の羽音
のような雨のしずけさ

今は、雨宿りする場所なんてなかなかない。軒を貸してくれるような建物がない。でも、たとえば神保町を歩いていて、ちょっと古書店の軒で雨宿りをしているという

場面です。そこで、雨の音に奇妙な懐かしさを覚えた。その奇妙な懐かしさをどういうふうに言うかという、「始祖鳥の羽音のような」と。ここがとても、テーマとしては懐かしいのだけれど、表現として斬新だな。だいたい、今の若い人は雨宿りの歌なんて作らない。そういう点でも、面白と思うのです。どうですか。

岡井 こういう歌を選ばれた三枝さんの面白さというのを感じましたね。それはそれとして、「始祖鳥の羽音のような」というのは直喩ですけど、あとの比喩の引っ張り方なんていうのは古典的ですね。うまいですね。柳澤さんは今、三十代だと思いますが、北海道に住んでいた二十代のころにこの歌を出されたのでびっくりしたのです。実は師弟関係でいえば私のところに数年いたかな。

三枝 岡井さんのお弟子さん？

岡井 その後、加藤治郎さんのところに移ったんです。加藤さんのところに行つてから非常に伸びましたね。私のときは、私の教え方が悪いのでしよう、甘ったるい歌が多かった。

三枝 この古書店の歌もそうですけれど、この人は、非常に現実的な場面をしつかりと捕まえて、かつ、それを詩的な表現に乗せることが上手です。その点が、今の若い人の中では群を抜いていると思うのです。たとえば、

履歴書に長所を綴る 朝顔の種のち
いさな文字整えて

履歴書を書くときは、より丁寧になりますよね。僕も、四月一日に文学館の館長になるために、何十年かぶりに履歴書を書きました(笑)。そういう丁寧さが「朝顔の種のちいさな文字整えて」と、いかにも女の子らしい、丸くて細やかな字の感じが出ていてね。うまいなあ、と思うのです。ほかにもたくさん話題にしたい歌があります。

既視感のある生き方であろうともガ
ソリンの虹みたいで駅へ

水溜りができていて、そこにガソリンの虹がある。それを跨いで駅へ行くのです

が、そのときに「既視感のある生き方であろうとも」と、つまり、本当に個性的な生き方なんてできなくて、みんなと同じような手探りを繰り返しているだけなのだけれど、それをすごく前向きに、一所懸命さとして出そうとしている。

今の若い人は、いろいろ手探りするけれど手ごたえがなくて、どうしようかという歌がすごく多いんです。その点この人には、自分の生き方や選択は個性的でもなんでもないけれど、それでも一步一步、前向きにいくことが大切だという、非常に積極的な姿勢が見えて気持ちがいい。

岡井 「始祖鳥の羽音」はともかく、「古書店」とか「朝顔の種」とか、今の「ガソリンの虹」とか、「物」ですよ。この人は物を捕まえるんですね。面白いです。

三枝 それが大切ですよ。そこは、選んでいて気がつかなかったけれど、物をどういうふうに分自分の心の装置として生かすかということ。それが歌の説得力ですね。岡井 物の捉え方、きつと加藤君のところでもリズムを叩き込まれたんじゃないかな。

ますます高まる表現技術

三枝 これも柳澤さんの歌です。

あ／フリーズ／逢いた／フリーズ／
いくらでも強制終了できる恋かも

今のパソコンという装置ならではの、トラブルの特徴をうまく生かして詠っている。最先端の道具をどういふふうを活用しながら、普遍的な恋というテーマを詠むかという、表現の冒険でもありますね。こういうところが面白い。

岡井 僕から加藤君のところに繋がっていった修辞、レトリックの工夫ですよ。ね。「恋」というのは、従来なら「情熱でいく」という感じですから、「強制終了」なんてできっこないものです。「フリーズ」はアメリカ語で、「凍結する」という意味ですね。「あ」とやって「フリーズ」ときて、「逢いた」とやって言いさしで「フリーズ」ときている。これはレトリックなのだけれど、おっしゃるように多分これは、一

行一行がひとつひとつ抑えていく。そういうところがインターネット的なんでしょう。これはしかし、一般にはどうですか？三枝さんは思い切ってここに出しておられるけれど、わりとわかりにくいのではないですか？

三枝 岡井さん、パソコンは？

岡井 やっていません。

三枝 パソコンをやっている人は、よくわかります。

岡井 そうですか。

三枝 たとえばね、文章を書いていて、突然画面が反応しなくなると、そこでストップしちゃう。「逢いたい」と打つつもりなのだけれど、「逢いた」で止まってしまふ。岡井 それが「フリーズ」か。ああ、なるほど。

三枝 だからね、フリーズ状態になると泣けてくるわけです。こちらとしては、名文を書いているのに突然ですから。これがうまく記録できなければそのままですから。

岡井 それが「強制終了」なんです。

三枝 強制終了しなければ、フリーズ状態を解除できないわけです。

岡井 それを言っているのか。じゃあ、まさにこれはパソコンの話だね。それをそのまま、歌に使ったんだ。

三枝 パソコンの特徴と恋。恋ということの手探り自体は、千三百年の普遍的なものです。

岡井 そうですね。

三枝 それを、パソコンというものの特徴を導入しながら詠った。

岡井 なるほど、なるほど。

三枝 なかなかうまいと思いました。

岡井 これは、若者にはすぐわかるのですね(笑)。

三枝 わかります。これまで岡井さんは表現の開発をなさってきた人です。

岡井 僕は、パソコンと関係なく、こういうことをやりました。

三枝 石川美南さんの歌で、どうしても岡井さんにお聞きしたいと思っていた歌があります。歌集「離れ島」の歌です。

話しても(ポンプで水を)話しても
(水を)あなたの声のはるけさ

こういう括弧付きの表現というのは岡井さんが開発したことでしたよね。

岡井 そうでしたね、そうだとおっしゃいますね。

三枝 そうだと思います。

岡井 でも、中には「いや、私だ」と言う人もいるよ(笑)。

三枝 僕は、岡井さんだと思っています。

つまり、どうしてこういう括弧表現というものを開発なさったんですか？

岡井 僕は「丸括弧」と言っていますけれど、今は「パーレン」というらしいね。

「話しても」というのは全然違う内心の声がある。外側の「話しても」というのは、

「話しても話してもあなたの声のはるけさ」という、ひとつの繋がりであって、それを

言いながら心の底で、もうひとつ別のものが出てきているでしょう。僕の歌だった

ら、この「ポンプで水を」のほうを表に出して「話してもあなたの声のはるけさ」の

ほうをパーレンに入れたと思います。

三枝 ああ、なるほど、なるほど。

岡井 美南さんは、これを逆に出している。

三枝 なるほど。外の場面を表に出して、

内面の声を括弧に入れる。ちょうどね、今回の大会大賞で山梨県立文学館長賞になった平山繁美さんの歌に括弧があります。

陣痛の度に頑張れと夫の声(いまい

じょうどうがんばるんだか)

これは内面の声ですよ。

岡井 そうそう、これです。これが普通です(笑)。

三枝 岡井さんが開発した、括弧表現ですね。つまり、外と自分の内面の声という二

重性を一首の中に導入する、それを、どう導入したらいいかということで括弧を使う。

岡井 美南さんは、逆にそういうところがやんちゃな人で、しかも物語性の強い連作

を書く人だから。この歌で「ポンプで水を」とか「水を」という状況は、連想はで

きるけれどもはつきりとはわかりませんね。「話してもあなたの声のはるけさ」と

いうのはわかりますけれど、それをこいうふうにつくるといふのは、なにかも

うひとつの物語があるんだね、きつと。ポンプで水を汲み出す、というね。

三枝 このように柳澤さんも石川さんも、現代の最先端の技術というものを、たちまちのうちに習得して使っている。

岡井 そういうことですね。

三枝 僕らの若いころとは、表現技術のレベルがまったく違うところにきているなと思います。

岡井 なにか、短歌ではなく、詩みたいなものを感じますね。きつと詩の領域のものをよく見ているのでしょね。さつきの

「あ／フリーズ」のようになってくると、みんながインターネットをやっているわけ

ではありませんから、やっていない人たちにはわけがわからない部分がある。でも、

短歌技術というものの、短歌の作り方というものを、少し前の時代とは違いかたちで、

自分たちの好みのものに変えていこうということを、絶えず考えている人が柳澤さん

であり石川さんでしょう。そこから出てきているのでしょね。

三枝 まったくそのとおりですね。

岡井 三枝さんご自身は、こういうことをやらないでしょう。

三枝 括弧の表現を使うとね、「これは岡

井さんの真似だ」と言われるから、僕はやりにくいですよ。若い人は平気なんだけどね。

岡井 そう、平気なんですよ。だって、四十も五十も年が離れているような人間がやっているのを真似したからって、何が悪いんだってことでしょ。

三枝 非常にテクニカルな部分でも高度で、しかも内容もなかなか斬新で、今の若い女性歌人たちは非常に頼もしいですね。

目 前の現実と対峙する若さ

三枝 もう一人、渡邊理紗さんを挙げました。富士吉田の出身で、今、医大生です。

岡井 ほう。

三枝 地元の、今後有望な人も岡井さんに紹介して、読んでいただきたいと思って、歌集『白きカーネーション』から四首挙げました。一首目は解剖の場面です。

献体の生のなごりと細長き心カテーターをそつとはづせり

岡井 これは、献体したほうの側の「生の

なごり」として、心カテーターが入ったままの体を解剖している場面みたいですね。

三枝 そうですね。「心カテーターをそつとはづせり」というところに、現場のリアルな感じが出ていますね。

岡井 そう思いますね。

三枝 それから、

開きたる胸に埋まる両の肺背まで深く質量を持つ

「背まで深く質量を持つ」というのは、やはり実際にそういう手作業をした人間でないと詠えないのではないかと思うのですけれど。

岡井 そう。僕は病理解剖をたくさんやりましたからね。「開きたる」というのは、どこを開くかというとな、胸骨がありますね。この胸骨をはずして両側の肺に進みます。これを読んで、ちょっと思い出しましたね。実際にやってみると、両肺が本当に見事な質量を持っていてね。左肺と右肺は大きさが違うんですけど、開いたときの色、質量感ね。それがいちばん奥の背骨

のところまで置かれているわけですね。この医学生は、質量の重さというものや、ずつしりとした感じというのを、なかなかうまく捉えておられると思います。

三枝 そうですね。

岡井 かつての僕のように、ひとつの仕事あるいは商売として死体を病理解剖している人間は、なんのためにそれをやるかと言えば、死因を突き止めたいからやっているわけでしょう。遊んでいるわけではない。でも、この人はまだ医学生だから、実際に自分が解剖をやる資格はありません。あれは資格が必要なのです。だから、外から見ているらっしゃる学生としての眼差しです。非常に新鮮で良かったと思いますね。見学者の半分ぐらいが、見ただけで気を失って倒れるんです。やはり、そんなに気持ちのいいものではありません。それを、この人は悠々として作っている。頼もしいな(笑)。

三枝 あと二首紹介します。

跳び起さる夢に出で来し切り傷の解剖体に酷く似るなり

居ながらに海彼の人のオベ出来る口
ポット技術は戦場のため

「跳び起きる」は、実習であろうと解剖を
するといのはすごいストレスで、そのス
トレスの強さがよく表現されているんじや
ないかと思えます。次の歌は、医療の最先
端の技術もやはり戦争絡みだ、と。そうい
う現実を医学生立場で直視している。そ
こが、なかなかいいなあと思えました。

岡井 それでね、表現が非常に即物的でし
っかりしていますね。どういふところで、
こういう自分のものを身に付けたのかなと
思うくらいです。この人は有望ですね、こ
れから。

三枝 そうですね。自分の目の前の現実と
全力で向き合っている。それが、独特の若
さでしょうね。

岡井 そういう感じがしますね。

高齢者ならではの歌の出現

三枝 若い人の歌を中心にお話をうかがっ

てきたのですが、やはり、ベテランの歌も
見てみたいですね。雨宮雅子さんの『水の
花』というのが、今年の詩歌文学館賞の歌
集です。これには、命の水際を意識した人
間ならではの味わいのある歌が多くて、そ
の点に関心を持ちました。

ハンカチは泪のために使ふことなく
なりて小さき菓子など包む

ハンカチというのは、本当は手を拭いた
り涙を拭いたりするものだけれど、涙が枯
れたということではなくて、もう喜怒哀楽
を超えている。

岡井 超越しているんだね。

三枝 そういう境地にいる人が、そのハン
カチを何に使うかというところ、「菓子など包
む」と。こんな展開をしたところが、さす
がにベテランの味だなど思いました。

岡井 うまいですね。雨宮さんは私より一
つ下、同世代です。クリスチャンで、初期
の時代からそれをテーマにしておられた。

宗教の歌というのは非常に難しいんです
ね。でも、ご主人が亡くなられて後、開き

直ったようなところがあつて、いい歌が多
いですね。この歌も、なんでもないように
思うかもしれないけれど、ハンカチの使い
方ということで「泪」を中心に、涙を拭く
ためということと、菓子を包むためという
ことを対照させているでしょう。目に見え
ないけれど巧みな歌ですね。長年作ってい
らっしゃるといふことです。

三枝 次の歌は非常にわかりやすいですね。

肉体の部分部分を修理して長寿を得
るといふはさびしえ

岡井 本当だね、我々の年代になると、つ
くづくそう思います。でも、医学の進歩と
かいろいろなもの拒否できるかとい
うと、そうではないのです。死ぬわけにはい
かないんですね。そのところが「長寿を
得るといふはさびしえ」なんです。さ
びしえ」なんていう古語はどうなんでしょ
うか。我々も使いませんね(笑)。

三枝 そうですね。

岡井 ある教養の幅で来た歌人だけかな。
でも、「さびしい」ではなくて「さびしえ」

というのは、古語の良さがあるなあ。

三枝 そうですね。この歌、口語にしたら
まったくだめですね。

岡井 だめですね。

三枝 古語が持っている、時間的な含みと
いうものが、一首を詩の厚みにしている。

岡井 そう、そういうわけです。

三枝 目立たないけれど、そういうところ
がベテランの味かなど。

腕かひなとは腕かひなもて人を抱くもの甲斐なき
かひな静かに洗ふ

理屈と言えば理屈なのですが、「甲斐なきかひな静かに洗ふ」というところに、一人この世に残ってしまった者の、境涯的な考えがあると読みました。

岡井 「腕」「腕」「甲斐なき」「かひな」、この同語反復、同音反復というのは、使い方によっては軽くなってしまおうのですが、この歌だと内容が重いからね。これはやはり、ご主人が亡くなられたこと、ご主人も歌人でしたから、それを言っているのかでかような。作者を知っているかないかですか

なり違いますね。この「腕」「腕」「甲斐なき」「かひな」という言葉、ここは「甲斐の国」だし、いいんじゃないでしょうかね（笑）。

三枝 最後の歌です。

亡きを恋ふるころは失せて亡き者
とさかひへだてぬさかひに棲めり

これも「さかひへだてぬさかひに棲めり」なんて、ちよっと先ほどの「かひな」と同じ感じです。

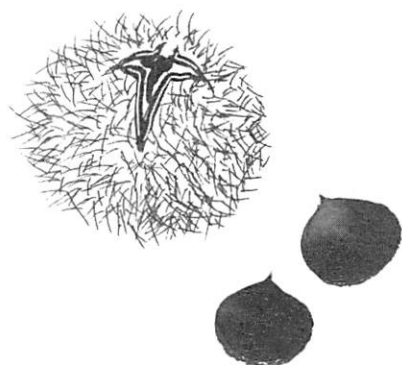
岡井 多少、意図的ですね。

三枝 たしかに意図的ですね。たとえば、ご主人が亡くなって、そのことを悲しんだり恋したりする境地も過ぎました。もう、あの人と私は、一生一緒なんですよ、という気持ちで詠われているわけですけど、こういう歌を見ると、短歌というのはつくづく人生的な長距離ランナーの詩形だと思えます。長く歌を作り続けなければこういう表現技術というものは身につかない。だけれども、長生きをして、人生の様々なものを背負わなければ、こういう境地には

届くことができない。

岡井 そうですね。そうすると我々が高齢者として人間を捉えた歌、たとえば斎藤茂吉も七十一歳でしたし、雨宮さんの歌もそうですが、つまり、我々の世界にいま初めて高齢者の時代がきた。そういう意味では、日々新たなものにぶつかっているとも言えます。それを表現すること、短歌がそれを実現できるとすれば、面白く可能性があるのかなあという感じがします。

三枝 急ぎ足ですけど、時間になりました。岡井さん、どうもありがとうございました。



「推敲の楽しさ」

高野公彦

推敲と添削の違い

今日は、「推敲の楽しさ」ということでお話をします。

「推敲」というのは、「自分の作品を練り直して、良い作品にすること」です。語源は「広辞苑」などにも出ていますが、唐の詩人・賈島かとうという人が、自作の詩の一部を「僧は推す月下の門」とするか、「僧は敲く月下の門」とするか迷って、韓愈かんゆうという詩人に訊ねたのです。「推」にするか「敲」にするかと。ですから、「推敲」という言葉自体には「作品を練り直す」という意味はないわけです。「推か敲か」どちらにするかよく考える、そこからできた言葉です。

我々、短歌を作る人間は必ず推敲という

ことをやります。これと似た言葉に「添削」があります。混同されやすいのですが、添削は「他人の作品を手直しすること」ですね。みなさん、それぞれ短歌の先生がいらつしやる方が多いと思いますけれど、その人が自分の作品を直してくださることを「添削」と言います。「添削を受ける」というふうに言います。言葉を添えたり削ったりするのが「添削」という意味です。

今日は「推敲」、自分の作品をどう直していくかという実例をご紹介します、みなさんが明日から短歌をお作りになるときに生かしていただきたいと思っております。

諦めずに作品を押し上げていく

まず、実例を挙げますと、与謝野晶子の

推敲例です。与謝野晶子という人は、調べ

ますと、そんなに推敲しない人のようですが、割に大きく直してそれが非常に有名になった歌があります。最初が原作で、次が歌集に入った推敲した後の作品です。

若ければふらんすに来て心酔ふ野辺
の雛粟粟町の雛粟粟

明治四十五年六月二十六日の東京朝日新聞に発表されたときのかたちです。それが、三年後くらい、大正三年に出た歌集『夏より秋へ』の中では、次のように変えられています。

ああ皐月仏蘭西の野は火の色す君も
雛粟粟われも雛粟粟

これは与謝野晶子の歌を、前期、中期、

後期に分けるとすれば、中期くらいに当たる時代だと思えます。晶子の代表的な歌で、たしか小説家の渡辺淳一が「君も雛嚳粟われも雛嚳粟」というタイトルの長編小説を書いておられますけれど、この歌からとったわけです。

原作は「自分はまだ若いので、フランスに来ていろいろなものに心が酔ってしまふ。たとえば雛嚳粟の花——芥子の花が野辺にも咲いていて、町にもたくさん咲いていて、それらに心が酔ってしまう」という意味です。雛嚳粟は今風に言うところでは、芥子の花です。これが、新聞に発表された最初の歌ということですが、わかりやすいですね。それを推敲して「ああ皇月」として時間を入れました。「仏蘭西」は原作にもあります。「火の色」というのは赤い芥子ですね。その色を表したわけです。「君も雛嚳粟われも雛嚳粟」というのは、広い野原があつて芥子の花がいっぱい咲いている。その中で、自分と夫の鉄幹の二人がポピーの花の群れの中を歩いていて、楽しそうに話をしている。こんな情景でしょう。非常に若々しく美しい歌になりましたよ

ね。

この原作と歌集の作品を比べますと、原作も作る時には一所懸命に作ったのでしようけれど、このままで歌集に入れてもたいた歌ではありません。そこで諦めないで、「いい歌にしたい」という気持ちがあつたのでしよう。歌集の作品のように大幅に内容を変えました。そして、与謝野晶子の代表作のひとつになりました。このように、諦めないで作品を押し上げていくということ。上を目指す心が推敲という行為になつて出てくるわけです。

みなさんも、もちろん推敲をなさつていると思えます。この後にもいろいろな推敲例をご紹介しますので、ご覧になつて、推敲にうんと時間をかけていただきたいと思えます。僕の考えでは、歌を作るのに三十分、推敲三時間。こんな感じですね。

情景を際立たせる

次は、小説の例を挙げましょう。芥川龍之介の有名な「羅生門」という作品です。ご存知の方が多いと思いますが、時代

は平安末期、荒れ果てた都のはずれにある羅生門で起きた事件を描くというかたちの小説です。ある夜、門の下で雨がやむのを待っていた下人（身分の低い人）が、ふと何かの気配を感じて楼の上の上つてみると、老婆がいて、女の死骸から髪の毛を抜いていました。たとえ悪いことであつても、何かしなければ飢え死にしてしまふから、こうして髪の毛を抜いてかつらを作るんだ、というようなことを老婆が言います。それを聞いた下人が、自分も何かしなくては生きていけないと心を決めて、やにわにその老婆の着物を剥ぎ取つて、梯子段を駆け下りて去っていく。こういう小説ですね。その最後が、こんなふうになつていきます。

暫、死んだやうに倒れてゐた老婆が、死骸の中から、その裸の体を起したのは、それから間もなくの事である。老婆はつぶやくやうな、うめくやうな声を立てながら、まだ燃えてゐる火の光をたよりに、梯子の口まで、這つて行つた。さうして、そ

こちら、短い白髪を倒にして、門の下を覗きこんだ。外には、唯、黒洞々たる夜があるばかりである。

下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでゐた。

これが原作です。大正四年、「帝国文学」という雑誌に発表されたものです。それから二年後に、この「羅生門」と、その他何篇かの短編小説を集めた創作集を出版します。出版したのは阿蘭陀書房というところですが、今はもうありませんが、この出版社は北原白秋の弟である北原鉄雄という人がやっていた出版社です。白秋の本も出していました。白秋にゆかりのある出版社から、芥川龍之介が「羅生門」という短編集を出したのです。このとき、推敲をして、最後の一行を変えました。雑誌に出たときには「下人は、既に、雨を冒して、京都の町へ強盗を働きに急いでゐた」となっていたのですが、それを「下人の行方は誰も知らない。」と変えたんです。非常に簡潔な表現にしました。そうすることで、原作の「外には、唯、黒洞々たる夜があるばかり

である」という、真つ暗で奥深い感じの「黒洞々」という言葉がさらに生かされると考えたのではないかと思います。このように、小説も推敲することがあるわけです。

描写を強めた芭蕉の「改案」

次は、俳句の推敲例を見ていきましょう。松尾芭蕉です。この人はよく推敲を重ねる人でした。推敲に命を懸ける人を「推敲魔」と呼ぶとすると、僕が知っている範囲で、松尾芭蕉は推敲魔の一人です。あとは北原白秋。めちゃくちゃに変える人ですね。僕の先生である宮柊二も、かなり変えていました。宮先生が歌集をお出しになるとき、誰かが清書した原稿に先生が手を入れておられました。それを出版社から印刷所に入れますと、初校の校正ゲラが出てきます。宮先生は、それをまた変えるんです。僕は、その校正のお手伝いをしたので、元の原稿と初校で先生が赤字を入れて推敲なさるのを目の当たりに見て、すごいなあと思いました。中には、こうすると原作よりも悪くなるのではないかと思うケー

スもたまにありましたけれどね（笑）。

もちろん、推敲によって作品がぐんぐん良くなっているのです。その当時は、ただ校正の手伝いという意識しかありませんでしたけれど、結果としては推敲を目の当たりに見たということ、すごくいい勉強になったと思っています。

松尾芭蕉に戻りましょう。このころは、原作という呼び方はしませんが、「初案」と言っていました。変えたものは「改案」と呼ぶのが普通でしたが、ここでは今風に「原作」「改作」と呼ぶことにします。まず原作は、

あなたふと木の下闇も日の光

という句です。これは、「奥の細道」の初めのほうに出てくる、日光での句ですね。

「あな」は「ああ」、「たふと」は「とうと」と読んで「尊い」という形容詞の語幹にあたる部分です。「ああ、尊いことだ。木の下闇にも明るい日の光が差し込んでいゝる」というのが表面的な意味ですが、もう一つの意味があります。日光東照宮は徳川

家康を祀っているわけですから「徳川様のご威光のおかげで、暗い木の下の方まで明るく日の光が差し込んでいます」という意味を込めているんですね。日光を詠って、風景の裏側で徳川を称えるという作り方をしている、なんとなく理屈っぽい感じがします。これを推敲したのが、

あらたふと青葉若葉の日の光

です。「木の下闇」というのをやめて、「山全体の青葉若葉に日の光が当たって美しく緑に輝いている」と、風景画の要素を非常に強くしたわけです。理屈っぽい言い方をやめて、描写にした。まことに上手な推敲だと思います。

次は、平泉に行ったときの俳句です。原作を見ると、ちよつとがっかりします。

五月雨や年々ふるも五百たび

これは、中尊寺の光堂が作られてから五百年後くらいに訪ねたので、「毎年、五月雨が降っているけれど、五百たびも降

ってきたことよ」と、歴史の長さを言ったわけですね。それを

五月雨の降りのこしてや光堂

と、これも風景画、つまり描写の作品にしました。実に見事なものですよね。「光堂が美しく光り輝いている。五月雨が降っているけれど、五百年経ってもこんなに美しく金色に輝いているのだ。どこにでも降るはずの五月雨が、この光堂にだけには降らない、降り残したような、それほどの美しさであることよ」という意味です。見事な推敲だと思います。

次の句は、

山寺や岩にしみつく蟬の声

これを、

閑さや岩にしみ入る蟬の声

としました。「山寺」をやめたんですね。ですから、場所がどこかわからなくなった

わけですけど、「岩にしみ入る蟬の声」で、セミの声のやかましくてかつ、ものすごくしんとした感じを表現するために、「閑さや」という言葉にしたのでしょうか。「しみつく」も良くないですね。「山寺」を「閑さ」に変えてしまうという、大胆な推敲だと思います。

それから、最上川の句です。原作は、

五月雨を集めて涼し最上川

でした。その当時の俳句は、ある場所、ある人の家に行つて作ることが多かったのですが、その場にいるその家のご主人とか、その町の人々とか、町に祀られている神様とか、その土地の何かをほめるという要素が大事だったんですね。それを、山本健吉先生は「挨拶」という言葉でおっしゃっています。何かに対する挨拶の要素が、しばしば俳句の中にはあった。現代の俳句にはそういうことは稀薄になりました。「五月雨」というと、今でいう六月ころですから、蒸し暑いわけです。蒸し暑い中、船に乗って最上川を下って行くのですけれど、

最上川はさすがに大河ですから、涼しい感じがする。とりあえず、「涼し」と最上川をほめるわけですね。そのほめる要素を抑えて、推敲では描写の要素を加えた。

五月雨を集めて早し最上川

この句です。「この河は水量も多くて水の流れもはやい。本場に立派で、最上川はみちのく第一の河である」と直した。ほめる意味ももちろん入っています。「涼し」というのは気持ちですけれど、「早い」という描写の要素を濃くするのが、芭蕉の推敲の基本です。

こうしたことは短歌にも言えると思います。与謝野晶子の「若ければふらんすに来て心酔ふ」という短歌も、自分の心を言っている、説明しているだけです。その部分は要らないわけです。ものを描写する要素を強めたのが「雑器粟」の歌です。芭蕉の推敲もそうです。描写を、強めることで、作品の中身が充実していくということです。

一つの言葉で歌が変わる

斎藤茂吉の実例を見てみましょう。『あらたま』という第二歌集の編集後記を見ると、自分でわざわざ原作と改作をいくつも並べています。なぜそんなことをしたのか、僕にはよくわかりませんが、お弟子さんに「歌はこのように変えると良くなるんだよ」と、教える意味もあつたのではないかと思っています。茂吉は、そんなに大幅には変えていませんね。いくつか例をみましょう。まず、改作のほうを読みます。

冬原に絵をかく男ひとり来て動くけ
むりを描きはじめたり

これの原作が、

原つばに絵をかく男ひとり来て動く
けむりを描きにけるかも

です。原作のほうは、「原つばに男がいて、けむりを描いたことよ」という、おおまか

な言い方をしています。その改作として「原つば」を「冬原」にしたことで、イメージが明確に浮かびますね。「冬原」ということで、草木があまり繁っていないということがわかるのです。そのことによつて「けむり」が大きくクローズアップされました。そして「動くけむりを描きはじめた」とした。原作は「描いた」と言つて、描いたこと全体を言っているけれど、それを「描きはじめた」とした。「何を描くかと思つたらけむりを描きはじめたことよ」として、時間的に限定したわけです。描き始めてから描き終わるまでを詠つたのが原作ですが、描き始めのところに焦点を絞つたということですね。これも効果的で、参考になると思います。

次の歌、これも改作です。

はざまなる杉の大樹の下闇にゆふこ
がらしは葉おとしやます

ですが、この原作は

はざまなる杉の大樹の木下闇ゆふこ

がらしは葉おとしやまず

です。三句目の「木下闇」を「下闇に」と直していますね。これは、大きな直しではないですけど、なぜ直したのでしょうか。原作のままでもいい歌だと思えますけれど、「大樹」とあって「木下闇」とある。大きな樹のその木の下の闇ということ、よく見ると「木」がダブっていますよね。

このダブっているということで、「木下闇」を「下闇」にしたんじゃないかと思うんです。細かい仕上げをしたという感じですが、中身を大きく変えてはいませんが、こういうことも大事なことであるわけです。

しかし茂吉には、初出のかたちと、歌集に載ったかたちを調べても、大きく変えた例はあまりありません。逆に言うと、雑誌に発表するとき、すでに十分に推敲していたのではないかと思えます。

白秋の青春歌の場合

白秋の例を見えます。第一歌集「桐の花」の有名な歌です。

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめ
て心願ひそめし日

これは改作です。原作は、

ヒヤシンス薄紫に咲きにけりはじめ
て^{キス}を^{キス}おぼえそめし日

です。原作でもいいのですが、改作とどう違うかと言いますと、改作には、「性的に目覚めて初めて誰かを好きになって、何かを言おうとしてもうまく言えない。心がふるえて、ある女性を好きになる心をどうしても抑えきれない」という、初々しい感じがあります。原作のほうは、じかに性的な行為を詠っています。さわやかな青春の歌にしたというのが、推敲の目的ではないかと思えます。

次は、「あつ」と思うような推敲です。

かくまでも黒くかなしき色やあるわ
が思ふひとの春のまなざし

「恋人がいてその人のことを思っている。その黒い瞳が非常に印象的で好きだ。美しい黒い目であって、かつ憂いをふくんで、その目のことを思うと心がふるえるような気がする」というような内容の歌です。先ほどの歌と同じように、青春の無垢な青年のふるえるような恋心を描いていますね。しかし驚くことに、

かくまでも黒くかなしき色やあるわ
が歌姫の倦みつる瞳

というのが原作です。「歌姫」というのは、酒宴で歌ったり踊ったりして客を楽ませる芸者さんのことです。芸者さんという呼び方もあります。その人のことを詠った歌で、どこかでお酒を飲んでいて「お、なんだかい芸者さんがいるね」というのが原作ですが、それを、若々しい青年の恋の歌にしたんですね。

個人的な事情をどう詠うか

次の歌も改作です。

廃れたる園に踏み入りたんぼほの白
きを踏めば春たけにける

「廃れたる園」ですから、手入れをしなくなつて草もぼうぼうと生えているような感じの園ですね。公園、もしくは菜園のようなところを想像します。そこにたんぼほが咲いて、白い絮ができています。うっかり踏むとばあつと絮が飛び散つて、春も深まつたという感じがするという、けだるい感じの歌です。原作は、

廃れたる園に踏み入る哀愁はなほし
めやかに優しけれども

と、主観的なことを言っているだけで、これではとても白秋の作だとは思えないほど、平凡な歌です。ただ自分のもやもやした感情を言っただけで、作品の価値はありません。それを、描写の歌にしたわけです。描写の要素を非常に強めました。

現実的にどういふ場面で詠まれたかということを調べますと、白秋は福岡県の柳川

にある、大きな造り酒屋に生まれています。もう家業が倒産しかかっていたのですね。そのころ白秋は学生で、東京に出てきていました。家業をどうするかと、家族が集まつて話をするとき、長男であつた白秋も故郷に帰つた。そのとき、実家の裏手にある菜園で作つた歌なんです。

非常に悲しいので、最初は「廃れたる園に踏み入る哀愁はなほしめやかに優しけれども」と、当時、自分のおかれていた状況、倒産して家をすべて人手に渡さなければならなくなつたという、心理的なものをナマで出したのが原作です。それを、そんなことを歌つてもしょうがないから、もつと描写の要素を強めようとしたのが改作です。「廃れたる園に踏み入りたんぼほの白きを踏めば春たけにける」と。

悲しみが、なんとなく漂っているような感じがしますよね。わけのわからないような悲しみの感情が漂っている。調べてみると、家が没落してゆく、そういうことが原因でこういう歌ができたのだ、ということがわかります。説明しなくても、歌の中に悲哀感が出てくるわけです。描写のほうが

作者の気持ちがよく伝わるということですね。「哀愁はなほしめやかに優しけれども」などと言っても、なんにも伝わりません。白秋のような天才的な人でも、初めは凡作と言つてもいいような、こんな歌もあつたわけですね。それを白秋は、自分自身で救つたわけです。推敲によつて、いい作品に押し上げたのです。

もう一首、ご紹介します。

クリスチナ・ロセチが頭巾かぶせまし
秋のはじめの母の横顔

これが改作ですね。原作は、

クリスチナ・ロセチがごともいと親し
秋のはじめの母の横顔

です。お母さんに対する親愛の感情を詠つた歌と言えらると思えます。原作は「いと親し」とお母さんに対して「お母さんはなかなかいいなあと思う」という感情を、やはりナマで出しているんですね。それをやめました。「クリスチナ・ロセチ」というの

は、イギリスの女流詩人です。その人が被っていたような頭巾、帽子を被せたら似合いそうな感じがするということ、これも一種の描写ですね。「親しい」と言わないで、「クリスチナ・ロセチが被っていた頭巾を被せたら、よく似合うだろう」と、こちらのほうがいいですね。これも、見事な推敲だと思います。「ロセチが頭巾」は、「ロセチの頭巾」という意味です。

二つの歌を推敲で一首に

次は、宮柵二の歌をご紹介します。宮柵二も推敲魔と言えるような人でした。「群鶏」という、第一歌集に入っている歌です。

澡瓶^{つぼ}提^ひげてた^たたす^すほと^とけ^けの^の胸肌^{むなはだ}の^の二^二
つ隆^つ起^起よ^よわれ^れは^は消^けぬ^ぬべ^べう

これが歌集に載っているかたちで、法隆寺の百済観音を見て作った歌です。水を入れる壺を提げて立っている、スラリとした百済観音です。「たたす」は、「立っている」という言葉の敬語表現です。「壺を提

げて立っていらっしやる仏様の胸肌」ということですね。仏様というのは、男か女かはつきりしないのですが、男であろうかと思えます。でも、胸のあたりにほのかな膨らみのある仏像が多いですよ。仏像は原則として男だけれど、女性性というものも入っていると言われています。

若い宮柵二が、「百済観音の胸肌にほかに女性のような膨らみがあるのを見ると、私は消えてしまふべきだと思われる」と感じた。「消ぬべう」は「べく」のウ音便で「びよう」と読みます。仏像の美しさと、ほのかなエロチシズムを表現した歌だと言えると思います。この原作は、実は二つの歌を一つにしているんですね。

消^けぬ^ぬべ^べく^くし^しわれ^れは^は思^{おも}ほ^ほゆ^ゆま^まな^なか^かひ^ひに^に
百^ひ済^済ほ^ほと^とけ^けぞ^ぞ立^たち^ちたま^まひ^ひけ^けれ

これが原作の一つです。「自分はもう、消えてしまふべきであるように思われる。まなかに百済仏が立っていらっしやるのを見ると」ということで、どうして消えてしまふべきだと思われたのかは、この歌だけ

ではわからないですね。もう一首が、

澡瓶^{つぼ}提^ひげて^てた^たた^たす^すほと^とけ^けの^の胸肌^{むなはだ}の^の匂^{にお}
は^はし^しき^き線^{せん}は^は下^{した}肢^{あし}に^にな^なが^がれ^れつ

ということで、彫刻はこういう形であるということ詠っています。ここに「胸肌」が出てきますね。「消ぬべく」「澡瓶提げて」「胸肌」という言葉をあわせて、改作の一首にしています。初出を調べて、この二つを合わせて一首にしたということを知って、本当にびっくりしました。珍しい例です。推敲しているうちに、「この二つを一緒にすれば、いい歌になる」ということに気がついたんでしょうね。

自分の中に優れた読者を持つこと

有名な歌人の推敲例をご紹介しますが、今度は、「僕がこの歌の作者だったらこう直す」という例をご紹介します。他人の歌を、高野が自由に推敲したのですが、こんなに勝手なことをしてはいけないのですが。(笑) いろいろなところから探し出

してきた歌を、「こうすればもつと良くなるんじゃないか」と、自分流に主観的に直してみました。僕は「コスモス」などで詠草の選をしますが、このときは原作尊重で、あまり大幅な直しはしないようにしているんです。だけど、自分の歌を直すときは、いくら直してもいいわけですから、そういう推敲の意識でやってみたものです。これを言うと、「ああ、高野はこんなふうに歌を作っているんだな」となんだかばれそうで、あまり言いたくはないんですけれど（笑）。

直し方の一例として「こう直さなければいけない」ということではなくて、「こう直すと、原作とはだいぶ離れるけれどいい歌になるのではないか」というような、そういう意識で直してみた例です。まず原作を読みますが、この原作は、いろいろなところの新聞の選などもやっていますので、そこで採らなかつた歌の中から選びました。

明け方の高速道路の高架下に「春の小川」のハモニカ聞こゆ

これはこれで、いい歌ですよ。こうしなくてはいけない、というのではなくて、こういうふうに変えることもできる、こう変えたらどうだろう、と思ったのが次の歌です。

明け方の高速道路の高架下に「月の砂漠」のオカリナ聞こゆ

まず、歌の名前を変えました。それから楽器も変えたんですね。「春の小川」をハモニカで吹いている、別にこれでもかまいませんけれど、上を車がビュンビュンと走っている高架下で、「夕月の」砂漠を「」と静かな曲を吹いている、しかもオカリナで吹いているとすると、雰囲気がいいのではないかと思ひましてね。もちろん、僕が選をするときは、こんな添削を勝手にできませんから絶対にやりませんけれど、自分の歌だつたらできるわけです。自由ですからね。

推敲のときの気持ちの持ち方は、次のように考えればいいのです。自分が最初「春

の小川のハモニカ聞こゆ」と、事実即して歌を作ったとします。事実はそのだけれど、いい歌にしたければ事実と違っていても、「月の砂漠」に変えても「オカリナ」に変えても、かまわないわけです。最初に目指したところに到達したからといって、いい歌になったとは限りません。最初に目指した地点が、いい歌かどうかわからないわけですからね。作ったものがいい歌かどうかを見て変えていく。こういう考えで推敲をすればいいんです。

でも、「お日様が西から昇る」というような、事実と反するような歌は、だめです。それ以外は自由ですから、小説家が小説を書くように、短歌を作ってもいいのではないかと、僕は思います。自分で作ったものが五七五七七七になったら、一応できたと思いますが、その歌というのは自分が詠いたことを詠ったものであつたとしても、それが平凡であることが多いわけですから、作った歌がいい歌であるかどうかを、まず自分で判断することですね。いい歌じゃない、と思つたら中身を変えていく。仕上げをするのではなくて、中身を変

えるということですね。推敲には、そういう考えが必要なのではないかと思えます。

歌を作るとき、どこに着地するかは自分でもわからないということです。いい歌になつたときに初めて、「自分は着地すべき所に着地できたんだ」と、こう考えればいいわけです。結果がよくなければ、最初に目指した地点にたどり着いても、それはだめなんですよね。自分が作った歌でも、いい歌かどうか自分で判断するということが大事なんじゃないかと思えます。

では次の歌です。原作のほうを読みますと、

買い物の予定いっぱい書き込んでそのメモ忘れ買い物に出る

と、よくある歌です。ユーモラスな歌でいいのですが、もっと描写の要素を入れて次のようにすることもできます。

買い物のメモを忘れてスーパーをさ

まよいおれば茗荷待ちおり

「ああ、そうか、茗荷を買おうと思っただんだ」という歌です。「茗荷が待っている」と、非常に具体的に言う。原作には、何を買おうとしたのか何一つないわけです。茗荷を、買おうとした物のうちのひとつとして、ここで出すわけです。そしてスーパーを歩いている、という描写の要素を入れた。どうですか？ 原作より、良くなっているでしょう。悪くなってしまうこともありませんが、悪くなつた場合には、また原作に戻せばいいわけです。

推敲は、家の改築とは違います。家の改築はいつたん始めると元には戻りませんが、改築は充分慎重にやらなくてはなりませんけれど、推敲は常に、だめなら元に戻れるという利点がありますから、大胆なことをやればいいんです。考えもしなかったような歌にしてしまうと、いい歌になることがある。そして、考えもしなかったような歌を作ること、嘘をついているようなやましい気持ちになるかもしれないけれど、遠慮しなくていいのですよ。考えもしなかったことが出てくるのではなくて、考えていたけれども自分で気がつかなかった

ことが出てくるのです。だって、自分の中にないものは出てきませんからね。どんなにデタラメをやつたとしても、その人が思いつくことは全部自分の中にあるものなんです。そう考えればいいんですよね。

何でもやる。まあ何でもやって、いい歌になるとはかぎりませんけれどね（笑）。

デタラメにいろいろなことをやって、いい歌になつたかどうかを常に判断しながら推敲をしていく。だから、自分の中に優れた読者がいなくてはいけないわけです。読者というのはどういうものかというところ、歌かどうかを判断する人、という意味ですね。自分が詠いたことを歌にすると、

「ああ、いい歌になつたな」と思えますよね。惚れ惚れとして「なんでこんないい歌ができたんだろう」と思つてね（笑）。

誰でもそう思いますよ。でも、その歌を次の日に読むとがっかりすることが多いですね。あの「がっかり」は、自分の中の読者が目覚めるわけです。作つた後に客観的な読み手が登場して、自分の作品を正しく評価する。いい歌かどうかの評価をする。だめなら作り直せばいいんです。

このあいだ全日本体操選手権がありました
が、内村航平を詠ったこういう歌があり
ました。

筋肉の骨格撓う 軋る 反る 声な
く見入る内村航平

いい歌ですね。「筋肉の骨格が撓う」と
か「軋る」とか、なかなか面白い歌ですけ
れど、「声なく見入る」が、「あまりにもす
ばらしいので感心して、声なくみとれてい
る」と、ただ気分を強調しているだけです
から、これは要りません。描写にししま
う。

筋肉の骨格撓う 軋る 反る 澄み
て下り立つ内村航平

着地をピタリと決めたというのを「澄み
て下り立つ」としてみました。これも描写
なんです。原作のほうもすばらしい歌で
すけれど、このように変えることもでき
るのではないかと思いました。

NHK学園笛吹市短歌大会大賞

捨てないが履くことはない革靴のようだとはくは気付いてしまった
愛媛県 檜垣実生
迷いたる揚句にやっと見つけたる迷路の出口はあざやかな虹
静岡県 青木信一

△題詠「子」▽

おくやまの真木の林のほひたて入学の子の鉛筆けづる

山口県 森田アヤ子

NHK学園伊香保短歌大会大賞

美術館の隅に置かれし冷水器小鳥のように少女ら群れる

東京都 岡本和子

水揚げの縞美しき蛤の売られて浜は春深みゆく

千葉県 外村越子

△題詠「音」▽

五十肩を少し無理する音域にブルグミュラーおさらいしおり

長崎県 峰 由美子